

アイメイクが顔パーツの配置知覚に及ぼす影響

阿部 瑠那

化粧を好んで行う女性が化粧をする目的は、「魅力度向上のため」「流行を取り入れるため」の2つである。流行に関して、現在は両目の間隔を狭く見せようとする「求心メイク」および、広く見せようとする「遠心メイク」が流行っており、これには魅力的な顔特徴が関係している。また、先行研究(九島・斎藤, 2015)により、化粧は顔パーツの配置知覚および顔の魅力に影響を及ぼすことが明らかになっている。そして、求心メイクや遠心メイクには、両目の間隔の知覚、すなわち顔パーツの配置知覚にも影響を与える錯視効果があると推察される。そこで、本研究では、求心メイクおよび遠心メイクの魅力とメイクによる錯視効果に着目し、リッカート尺度による魅力の測定と心理物理学的測定法による錯視量の測定を行った。

実験Ⅰでは、求心メイク・遠心メイクを施した求心顔あるいは遠心顔の魅力評定課題を行った。実験の結果、求心メイクまたは遠心メイクを施したそれぞれの顔の魅力度に有意差は見られなかった。すなわち、元の顔に関わらず、アイメイクを施せばある程度魅力的に見えることが明らかになった。これは、九島ら(2015)の研究と異なる結果であった。求心メイクと遠心メイクの魅力と、目の配置知覚への錯視効果は、独立して作用することが示唆された。実験Ⅱでは、求心メイクと遠心メイクが、求心顔あるいは遠心顔の両目の間隔の知覚に及ぼす錯視効果を検証した。実験の結果、化粧を施す顔の目の位置に関わらず、求心メイクに両目の間隔を狭く知覚させる錯視効果があることが明らかになったが、遠心メイクに両目の間隔を広く知覚させる錯視効果はなかった。両目の間隔が変わって見える原因として、アイメイクによる目の重心シフト(アイライン、アイシャドウを施した側に目の重心がずれて見える)効果と目の過大視錯視を考えてみる。目が過大視されれば、幾何学的錯視の1つであるボールドウィン錯視が起り、目の間隔が狭く見えるはずである。求心メイクにより両目の間隔が狭く知覚されたことは、(A)目の重心が内側にシフトして見える効果とボールドウィン錯視のどちらか、あるいは(B)両方が加算的に生じたことを示唆する。他方、遠心メイクでは両目の間隔知覚に対して効果が無かったことは、(C)目の重心が外側にシフトして見える効果とボールドウィン錯視の両方が生起し相殺し合ったか、あるいは(D)どちらも生起しなかったことを示唆する。もし重心シフト効果のみが生起していたら両目の間隔が広く見えたはずであるし、ボールドウィン錯視のみが生起していたら両目の間隔は狭く見えたはずだからである。そこで、もし求心メイク・遠心メイクにより目の過大視が実際に生じていることを実証できれば、ボールドウィン錯視と重心シフト効果の両方が生じたことが強く示唆されることになる。そのため、実験Ⅲでは、求心メイクと遠心メイクが、求心顔あるいは遠心顔の両目の大きさの知覚に及ぼす錯視効果を検証した。実験の結果、求心メイクでも遠心メイクでもほぼ同程度に目の過大視が生じた。ボールドウィン錯視のみが生起し遠心メイクによる重心の外側シフト効果が生起しなかったとしたら、両目の間隔は狭く見えたはずであるが、実験Ⅱでほとんど変化が無かったため、ボールドウィン錯視と遠心メイクによる重心の外側シフト効果の両方が生起し互いに相殺し合ったと考えられる。すなわち、上記の(B)と(C)が支持された。ちなみに求心メイク(アイシャドウとアイライン両方)が最も目を過大視させることが明らかになった。

本研究では、求心メイクには両目の間隔を狭く知覚させる錯視効果があり、その原因には、求心アイラインと求心アイシャドウを組み合わせた際の目の過大視が影響していることが示唆された。(基礎心理学)